

志向性とべきの専制の形成因の検討 ——幼少期の家庭の雰囲気と自我発達の様相——

立教大学¹ 茂垣まどか

Effects of Childhood Family Atmosphere and Ego Development on the Formation of Intentionality and the “Tyranny of the Should”

Madoka Mogaki (Rikkyo University)

This study examined the relations among three concepts: 1) the senses of intentionality and the “Tyranny of the Should” (TS) as an indicator of a healthy ego and ego ideal development, 2) recognition of the childhood family atmosphere, and 3) the level of personality development as defined in Erikson’s Epigenetic Theory. Two hundred university students completed self-report questionnaires. Results showed that intentionality was weakly correlated with childhood family atmosphere (warmth) and moderately correlated with outcomes related to the first three stages of personality development on Erikson’s scale (namely, basic trust versus basic mistrust, autonomy versus shame and doubt, and initiative versus guilt). Similarly, TS was weakly correlated with childhood family atmosphere (obedience) and moderately correlated with outcomes related to the first three stages of personality development. Structural equation modeling revealed that while childhood family atmosphere did not directly affect formation of intentionality and TS, it did so indirectly through early personality development.

Key words: ego development, ego ideal, epigenetic theory, childhood family atmosphere, parenting style

志向性とべきの専制

茂垣 (2005) は、西平 (1981, 1990, 1996) の示した自我理想²型人格・超自我型人格概念および自我心理学の理論 (Blos, 1962; Erikson, 1968; Freud, 1940) を研究基盤として、“志向性” (項目例“そういえば、私はある方向性をもって生きている。”) および“べきの専制” (Horney, 1950 : 以

下、“べき”。項目例“私は、自分の中の‘こうしななければならない’という声にしたがって生きている。”) の直交する2因子で構成された自我理想型・超自我型人格尺度 (以下、EI-SES) を作成した。この研究において、“志向性”高かつ“べき”低群は自我理想型人格群、また対照群として、“志向性”高かつ“べき”高群は超自我型人格群と操作的に定義され、さらに志向性の低い2群も示され、志向性が高くべきの低い自我理想型人格群は、他の群と比較して相対的に精神的に健康であることが示された。

志向性およびべきの専制の形成に影響する要因

発達心理学的観点から、自我理想型人格の形成因に関する検討も重要だと考えられる。本論ではまず“志向性”および“べき”に焦点を絞り、その

¹ 兼任講師

² 自我理想概念については、多くの理論家や研究者 (Blos, 1962; Erikson, 1968; Freud, 1940; 西平, 1996) により検討・説明されているが、本論では若原 (2003a) で示された解釈を用い、“自我理想とは、人格形成にポジティブな影響を与える志向性を自我に持たせる機能であり自我に理想の方向性を示す機能を持つが、そのありかたは柔軟で、自我理想に影響された自我は、志向する方向性を主体的に選択する”を用いる。

形成因を検討する。この点についてはこれまでに研究されてこなかった。自我理想の発達の様相や形成因に関する調査研究は若干ある(岡田, 1987; Schenenga, 1983; Van den Daele, 1968)が、これらは、自我理想を道徳性や理想自己と現実自己の差異などの指標で測定しており、志向性およびべき、もしくは自我理想型人格の形成因は扱っていない。

暖かく愛情を感じられる養育環境と、しつけの過度な厳しさ 一方伝記研究³(西平, 1981, 1996; 大野, 1996)では、自我理想型人格の人物の幼少期の養育環境が示され、自我理想型人格形成の影響因として解釈されている。西平(1981, 1996)は、サルトル, J. -P.や福沢諭吉など自我理想型人格の典型的人物の幼少期について、超自我型人格の典型例(内村鑑三など)を対比的に挙げ、自我、超自我、自我理想概念を心理力動的に用いて分析し、自我理想型人格の養育環境の特徴として、第1に、“健康的で暖かい理想的な”(西平, 1996, p. 63)、“子どもへの無限の信頼と愛情がひめられ[た]”(西平, 1996, p.80)など、特に母親の愛情や暖かさを示した。第2に、厳しい父親の存在が子の厳しい超自我を形成する可能性や、母親の亡父に関する懐古談が、子に抑圧的でない理想像を示し、家の規範(遺風や家風)として伝えられ、それらが子の自我理想型人格形成に影響する可能性について示されている(西平, 1981, 1996)。第3に大野(1996)は、厳しい父親のかわりに立派な祖父へ同一視することで自我理想が形成される可能性を示している。しかしこれらは伝記研究の典型例から得られた知見であり、現代青年における一般性を確かめる必要がある。なお典型例に示された具体的特徴について一般化する

際、子の主観的認識という観点から捉える必要があるだろう。例えば、福沢諭吉の典型例(西平, 1996)では厳しい父親のエディプス葛藤前の死により、厳しすぎる超自我が形成されなかったことが示されているが、もちろん、物理的に父親が死去するか否かではなく、厳格な父親の不存在、つまり、厳しすぎるしつけがなされなかったこととして了解可能だろう。つまり暖かく愛情を感じられる養育環境やしつけの過度の厳しさなどが、自我理想型人格形成に影響する可能性があると考えられる。さらに、伝記研究では、自我理想型人格および超自我型人格、つまり茂垣(2005)の定義で言えば志向性の高い群のみ比較されているので、調査分析により検討するには他の要因も検討する必要があるだろう。

なお養育環境を検討するうえで親子関係のみを対象とすれば必要十分だろうか。若原(2003b)は、親の養育態度の認識だけでなく、“厳しい祖父が家のルール”といった他の家族成員や家全体の価値観が、自我理想型人格形成に影響する可能性を指摘した。また、同じ事象(例:母親の叱責)でもそれが本人の人格発達にどのように影響するかは、本人の人格に基づいた主観的認識によって異なると考えられる。西平(1996)の伝記研究では、母の回顧談が亡き父のイメージを作り上げ、それに自我理想型人格形成が影響されることが示されている。つまり、両親だけでなく他の家族成員を含む養育環境が人格形成に関わる可能性があり、物理的・実的な養育態度ではなく子がどのように受け取るかの主観的認識が人格形成に影響する可能性が考えられる。そこで本論では、幼少期の家庭全体の雰囲気に関する青年の主観的認識を検討する。

自我理想型人格を構成する要素である志向性・べきの専制と漸成発達理論の関連 西平(1996)や茂垣(2005)は自我理想型人格の精神的健康さを示した。一方Erikson(1959)は漸成発達理論第I段階の発達主題である“基本的信頼の感覚が、人生で発達していく精神的健康の第一の要素であり、自律の感覚が第二の要素であり、自主性の感

³ 伝記研究とは“一般に歴史上の人物などの伝記資料にもとづいて、その人物の生涯発達について研究する方法”(大野, 2010a, p.127)であり、“伝記分析, 心理-歴史的接近法(Erikson, 1958), 生育史分析(西平, 1996)”(大野, 2010a, p.127)とも呼ばれる。この手法についての妥当性, 有効性については大野(2010a)で論じられている。

覚（主導性3）が第三の構成要素である”（1959 西平・中島訳 2011, p.50）と述べ、漸成発達理論が自我、超自我等の健康な発達を示すと述べた。つまり健康な自我発達という点で両者は共通していると考えられる。自我理想型人格の形成という点では、特に初期の3段階が関連すると考えられる。なぜなら Freud, S. の精神分析的発達理論を発展させた Erikson (1959) は、第Ⅰ段階の基本的信頼感の発達を支えとして、第Ⅱ段階に自我が芽生えることで自律性が発揮されると述べている。また次の第Ⅲ段階では、両親からのしつけを通して超自我が形成されるとされている (Erikson, 1959)。また Freud (1940) は、自我理想を超自我の機能の一つだとし、青年に取るべき行動の方向性や指針を与えるものとして形成されるとしている。つまり初期の自我、超自我の健康な発達の様相を示す指標のひとつとして、基本的信頼感、自律性、主導性の発達が挙げられると考えられる。志向性とべきは超自我や自我、自我理想の発達の青年期におけるあらわれと考えられるので、その形成因を考える際に初期の自我発達について検討することは有用だろう。この Erikson 理論における初期の自我発達と養育環境について、三好 (2008) が、両者が正に関連することを示しているが、自我理想型人格を構成する“志向性”と“べき”の形成因については、現代青年で検討されていない。

ところで Erikson (1959) は自我発達理論を“漸成発達”だと述べ、前段階の発達を下地としてそれにより高次の発達が積み上げられると述べており、それを支持する研究も存在する (大野・キン・三好・内島・茂垣, 2007)。つまり、前段階の発達主題の解決の程度が後の主題に影響することが考えられる。漸成発達なので相互の関連が高いが、どの主題が特に志向性やべきに影響しているかという課題も発生する。そこで本論では、それらの両者について検討することとする。

目的

本論では、自我理想型人格の構成要素である志向性およびべきの専制の形成因について、幼少期

の家庭の雰囲気と漸成発達理論における初期の発達主題の解決程度の観点から検討する。具体的には、志向性およびべきと、青年が主観的に認識している幼少期の家庭の雰囲気との関連、また Erikson の漸成発達理論における初期の3段階の発達主題の解決程度との関連について検討する。幼少期の家庭の雰囲気の認識や初期の発達主題の解決程度は、“志向性”には正の方向に、“べき”には負の方向に関連すると考えられる。さらに共分散構造分析を行い、第1に、幼少期の家庭の雰囲気が志向性およびべきに影響すると同時に、初期の自我発達に影響し、そのことで間接的に志向性およびべきに影響するというモデルを検討する。また第2に、第1のモデルで示した内容について、各主題のどの部分が特に志向性およびべきに影響するか、さらに詳細に検討するモデルを作成し、検討する。

なお、因果関係を検討する条件として、(a) 時間的先行性、(b) 因果関係の理論的な必然性と整合性、(c) 他の変数の影響を除いたうえでの2変数の共変関係 (小塩, 2004) が挙げられている。著者の最終的な目的は、幼少期の養育環境や自我発達と現在の“志向性”・“べき”への影響の検討だが、本研究では“時間的先行性”について厳密に検討できていない。しかしながら、極端に言うと、人格形成のような長期的期間における発達を研究する場合、厳密に“時間的先行性”を条件とするならば、例えば Time 1 幼少期から Time 2 青年期までの、少なくとも10年以上の歳月がかかり、それまで研究知見が得られないことになる。また研究が進み、既に測定した以外の変数について検討したい場合、時間を遡ってデータを得られないという難点もある。そこで、いずれは、より確定的な理論構成のために縦断研究を行うとしても、現時点では、“過去の体験について、回顧法で現在の認識を尋ねる”手法を用いることが、研究の第1ステップとして、今後の研究に寄与すると考えられる。近年、自伝的記憶研究の領域で回顧された記憶の信憑性に関して多く議論されており、回顧された記憶が実際の体験とかけ離れてい

ないというレビューも示されている（佐藤・楨・下島・堀内・越智・太田，2004）。物理的・実際の現実ではなく主観的認識を問題にする場合、少なくとも現在の人格の様相とどういった過去の記憶（主観的認識）が関連しているかを検討することは、人格発達研究において有用なことだと考えられる。

因果の方向性の理論的背景は以下の通りである。第1に、家庭の雰囲気について幼少期の頃を想定して回答を求めること、第2に、記憶の変容という問題はあるものの、理論的・概念的に幼少期の記憶（認識）が現在の志向性やべきの専制に影響すると考えることに蓋然性があること、第3に、初期の自我発達（基本的信頼感、自律性、主導性）は、幼少期にその基礎が形成される（Erikson, 1959）とされていること、である。

方 法

対象者と手続き

“2003年調査”2003年11—12月に都内私立4年制大学学生（ $N=202$ [男性77名/女性115名]，平均20.5歳），“2006年調査”⁵2006年4月に都内私立4年制大学学生（ $N=200$ [男性80名/女性120名]，平均19.5歳）に対して、それぞれ大学での講義時間内に質問紙を配布し、集団実施した。

質問紙

“2003年調査”幼少期の家庭の雰囲気を測定する尺度を作成した。青年が認識する養育者の養育態度測定尺度は、PBI（Parental Bonding Instrument：Parker, Tupling, & Brown, 1979）の邦訳版（PBI日本語版：小川，1991）が著名だが、この尺度は、うつ病患者の親の態度・行動の特徴を分類・整理して作成されたものである。しかし本論の目的は健康な人格発達を捉える目的である。そこで自我発達に関する人格理論（Erikson, 1959；Freud, 1940；西平1996；大野，1996）を参考に項目を作成した。作成された項目群について、青年心理学・生涯発達心理学を専門とする心理学者4名によっ

て、内容的妥当性が検討された。項目の領域および内容は以下の通り。暖かく愛情のある雰囲気（14項目。項目例“家は、暖かい雰囲気だった。”）、叱り方などしつけに関する雰囲気（21項目。項目例“うちは、厳格な家風だったと思う。”）、子どもの意志尊重の雰囲気（11項目。項目例“家では、親や他の家族の言うことは何でも聞くほうだった。”）であった。“あなたが幼いころ、あなたのご家族全体の雰囲気やおうちの感じ、また自分についてどのように感じていたかお訪ねします。”と教示し、5“非常にそうだ”—1“まったくそうではない”の5段階で評定を求めた。

“2006年度調査”は以下の三つの尺度から構成されている。

Ego Ideal-Superego Scale (EI-SES) 自我理想型・超自我型人格尺度 Ego Ideal-Superego Scale（茂垣，2005：以下，EI-SES）は“志向性”および“べき”の二つの下位尺度からなり、それぞれの高低により自我理想型人格群や超自我型人格群を分類する尺度である。

Ochse & Plug の Erikson and Social-Desirability Scale の日本語短縮版 (S-ESDS) 初期の自我発達を測定する尺度として、Eriksonの漸成発達理論における初めの7段階の主題の解決の程度を測定する Ochse & Plug の Erikson and Social-Desirability Scale の日本語短縮版（三好・大野久・内島・若原・大野千里，2003：以下，S-ESDS）の、初めの3段階（基本的信頼感対不信[以下，“信頼”]，自律性対恥・疑惑[以下，“自律性”]，主導性対罪悪感[以下，“主導性”]）を用いた。なおこの尺度は4件法だが、回答の便宜を図るため、他の尺度とあわせて5件法にした。この尺度は、各段階の発達主題の解決程度の回答時点における様相が測定される。しかしErikson（1959）の発達理論においては、これらの発達主題に中心的に取り組み、基礎が形成されるのは、該当する段階である。その後変化する可能性もあるが、各段階での発達がベースとなるとされている。そこで本研究では暫定的に、S-ESDSによる測定結果を“幼少期の自我発達”とした。

⁵ 他尺度を含む調査全体の一部である。

Table1
家庭の雰囲気尺度の因子分析の結果および α 係数

	F1	F2	F3	共通性 ^{a)}
F1: 暖かさ ($\alpha = .89$)				
家は、温かい雰囲気だった	.88	.08	.12	.69
私の家は、雰囲気が悪かった	-.86	-.17	.03	.62
私は家で、比較的安心していられた	.82	.08	-.10	.64
私は家で、肩がこる感じがしていた	-.75	-.02	.01	.54
私は、家でリラックスできていた	.74	-.07	.02	.60
私の家は、のびのびできる雰囲気だった	.72	-.19	.03	.70
F2: 否定的雰囲気 ($\alpha = .73$)				
“～しなきゃだめよ” “～してはだめ!” などの言葉が印象に残っている	.13	.70	-.02	.40
親からの言葉で、“バカね、ダメでしょ”などの言葉が印象に残っている	.16	.68	-.13	.34
家では、私が何か新しいことをすると否定されがちだった	-.05	.57	.09	.39
家では、自己主張すると叱られた	-.13	.51	.05	.37
家では、自分のしたいことをのびのびやれた雰囲気だった	.30	-.49	.01	.49
F3: 追従的雰囲気 ($\alpha = .71$)				
家では、親や他の家族の言うことは何でも聞くほうだった	.25	-.06	.82	.65
私は、自分の意志を通すよりも、家族や家全体の期待に答える必要があると感じていた	-.03	.09	.68	.51
私は、親や家族に“イヤ”と言ったことがなかった	-.15	-.13	.59	.36
わがママが言えない雰囲気だった	-.25	.19	.39	.37
因子抽出後の分散説明率 (%): 33.39 10.92 6.86				

注) 反復的主因子法、プロマックス回転を用いた。^{a)}因子抽出後の共通性。

因子間相関は以下の通り。F1×F2: $r = -.55$, F1×F3: $r = -.18$, F2×F3: $r = .28$ 。

家庭の雰囲気尺度 2003年度調査で作成された家庭の雰囲気尺度(15項目)を5段階評定で用いた。

結 果⁶

家庭の雰囲気尺度の検討

2003年度調査で得られたデータを用いて、家庭の雰囲気尺度全48項目について主因子法・プロマックス回転の因子分析を行ったところ、固有値の減衰状況および因子解釈の概念的妥当性から3因子が抽出された。因子負荷量が.35以上、かつ当該因子以外への負荷量の低い15項目を採用し、再度因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った結果をTable 1に示した。

項目内容から、第1因子を、暖かく安心していられる雰囲気の認識を示す因子として“暖かさ”(項目例“家は、暖かい雰囲気だった。”)と命名した。第2因子の項目は、意志や主張を頭ごなしに否定される雰囲気の認識を示すものだった(項目例“～しなきゃだめよ”～してはだめ!などの言葉が印象に残っている。)。そこで第2因子は“否定的雰囲気”(以下“否定”)と命名した。なお、大野はこの養育態度について、一般的な具体表現を用いて、“バカダメ教育”(大野, 2010b, p.28)と呼んでいる。さらに第3因子を、意志を自由に示すことのできない雰囲気の認識を示す因子として、“追従的雰囲気”(項目例“家では、親や他の家族の言うことは何でも聞くほうだった。”, 以下“追従”)と命名した。因子間相関(“暖かさ”と“否定” $r = -.55$, “暖かさ”と“追従” $r = -.18$, “否定”と“追従” $r = .28$)から、幼少期に“暖かさ”を感じるほど“否

⁶ 分析にはSPSS for windows ver.11.0, Amos ver.4.0を用いた。

Table 2
EI-SES, 家庭の雰囲気尺度, S-ESDSの平均値, SD, α 係数

	EI-SES		家庭の雰囲気				S-ESDS		
	志向性	べきの専制	全体	暖かさ	否定的雰囲気	追従的雰囲気	信頼	自律性	主導性
平均値	3.70	3.00	3.75	3.93	2.21	2.48	3.43	2.88	3.31
SD	.79	.95	.69	.96	.85	.77	.56	.71	.60
α	.88	.83	.89	.93	.77	.68	.77	.73	.68

注) N=200。すべて5件法。各下位尺度は、合計値を下位尺度項目数で除してある。

Table 3
EI-SESと、家庭の雰囲気尺度およびS-ESDSとの下位尺度得点間相関

	a	b	c	d	e	f	g	h
EI-SES								
a.志向性								
b.べきの専制	.02							
S-ESDS								
c.信頼感	.43***	-.29***						
d.自律性	.47***	-.36***	.56***					
e.主導性	.42***	-.14*	.48***	.48***				
家庭の雰囲気								
f.家庭全体	.18**	-.16*	.43***	.47***	.42***			
g.暖かさ	.21**	-.12	.32***	.31***	.19**	.87***		
h.否定的雰囲気	-.11	.10	-.24***	-.24***	-.12	-.64***	-.84***	
i.追従的雰囲気	-.12	.19**	-.23***	-.26***	-.28***	-.37***	.35***	-.68***

注) N=200, ピアソンの相関係数。*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, 無印 not significant.

定”“追従”は感じず, “否定”を感じるほど“追従”を感じる事が示された。各下位尺度の α 係数は“暖かさ”は.91, “否定”は.73, “追従”は.71を示し尺度の信頼性が示された。

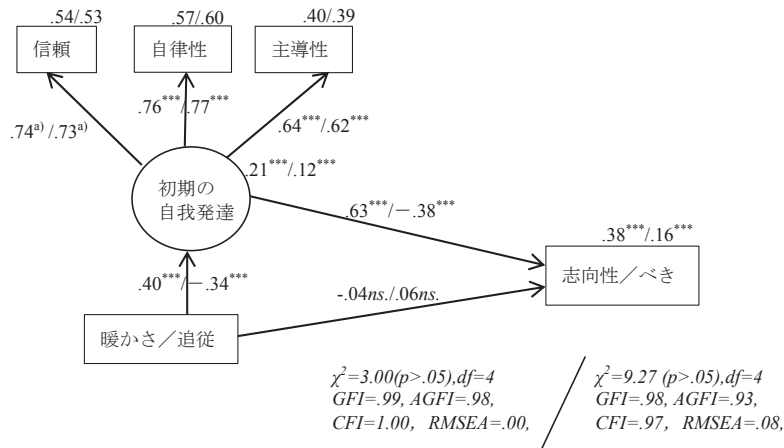
次に2006年調査のデータを用いて, 家庭の雰囲気尺度15項目について2003年度データと同様の手続きで因子分析を行ったところ, 2003年データと比較して, 各項目の因子負荷の高さの順序には若干の違いがみられたものの, 2003年データと同様の3因子が示された。そこで各下位尺度内で逆転項目を変換したうえで項目得点を合計し, 項目数で除したものを下位尺度得点とした。各下位尺度得点の平均値, SD, α 係数をTable 2に示した。また家庭の雰囲気全体の方向性を検討する指標として, “否定”“追従”の項目をさらに逆転したうえで, 家庭の雰囲気尺度15項目の項目得点を合計し, 項目数で除したものを尺度得点とし

た(以下, “家庭全体”: $a = .85$)。 α 係数は.68—.93を示し, 尺度の信頼性が示された。

自我理想型人格と、家庭の雰囲気尺度およびS-ESDSとの関連

EI-SESと、家庭の雰囲気尺度およびS-ESDSとの相関分析 EI-SESと、家庭の雰囲気尺度およびS-ESDSの下位尺度得点とのピアソンの相関係数をTable 3に示す。第1に“志向性”は, “家庭全体”と $r = .18$ ($p < .01$), “暖かさ”と $r = .21$ ($p < .01$), “べき”は, $r = -.16$ ($p < .05$), “追従”と $r = .19$ ($p < .01$)の相関があった。第2に, “志向性”はS-ESDSの“信頼”“自律性”“主導性”と正の相関(それぞれ $r = .43$; $r = .47$; $r = .42$, $p < .001$)があり, “べき”は負の相関(それぞれ $r = -.29$; $r = -.36$, $p < .001$; $r = -.14$, $p < .05$)があった。なお, S-ESDSと家庭の雰囲気尺度は, すべての下位尺度で正の相関が示された。

家庭の雰囲気尺度とS-ESDSがEI-SESに影響を



注) 標準化係数を示した。*** $p<.001$, ns.: not significant.
 紙面の都合により誤差は省略してある。観測変数・潜在変数の右肩の数字は決定係数(重相関係数の平方)。/の左が志向性, 右がべきを説明変数とした分析。
^a):モデルを識別させるために値 1 の固定母数に指定しているため検定統計量及び有意確率が算出されない。

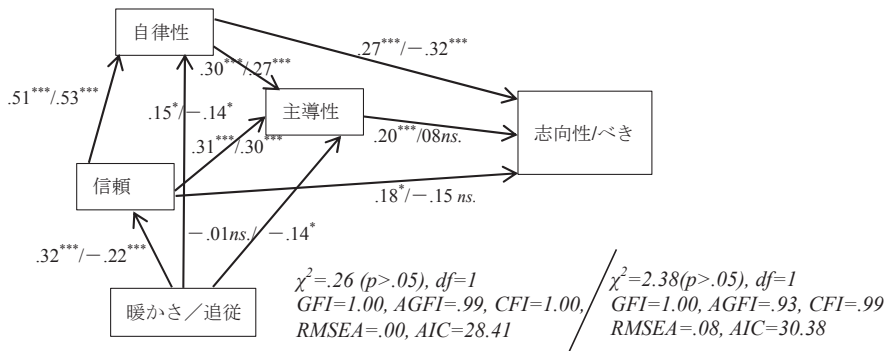
Figure 1. 志向性およびべきの専制に影響をおよぼすモデルの検討

およぼすモデルの検討 EI-SESを目的変数, EI-SESと相関のみられた家庭の雰囲気尺度下位尺度およびS-ESDSを説明変数として, 幼少期の家庭の雰囲気がEI-SESに直接影響すると同時に, 初期の人格発達に影響し, 間接的にEI-SESに影響するというモデルを作成し, 共分散構造分析を用いて検討した (Figure 1)。その結果, EI-SESに影響をおよぼす要因モデルについて, 適切な適合度が得られた。ただし, べきについてはRMSEAが.08であり, さらなるモデル検討の可能性も示された (志向性: $GFI=.99, AGFI=.93, RMSEA=.00$; べき: $GFI=.98, AGFI=.93, RMSEA=.08$)。

“暖かさ”は, “志向性”に直接影響しておらず ($\beta = -.04, ns.$), “信頼”“自律性”“主導性”の解決程度により構成される“初期の自我発達”が“志向性”に強く影響している ($\beta = .63, p<.001$)。また“暖かさ”が“初期の自我発達”に与える影響 ($\beta = .40, p<.001$) を通じて間接的に“志向性”に及ぼす影響は.25であり, “暖かさ”から“志向性”への直接効果-.04を加算し, 総合効果を求めると.21となった。次に“追従”は, “べき”に直接影響しておらず ($\beta = .06, ns.$), “信頼”“自律性”“主導性”の解

決程度により構成される“初期の自我発達”が“志向性”に強く影響している ($\beta = -.38, p<.001$)。また“追従”が“初期の自我発達”に与える影響 ($\beta = -.34, p<.001$) を通じて間接的に“べき”に及ぼす影響は-.13であり, “追従”から“べき”への直接効果.06を加算し, 総合効果を求めると.07となった。

家庭の雰囲気尺度とS-ESDSがEI-SESに影響をおよぼすモデルの検討 次に, S-ESDSの初期の3段階において, 前段階の発達主題の解決の程度が後の主題に影響する観点を取り入れたモデルを作成した。具体的には, “信頼”, “自律性”, “主導性”に潜在変数“初期の自我発達”を設定せずに, 前の観測変数が, より後の観測変数へパスを引くモデルを作成した (Figure 2)。このモデルの検討により, 他の変数を一定と仮定したとき, 自我発達のどの部分が“志向性”“べき”に影響するのかをより詳細に検討することが出来ると考えられる。なお適合度指標を算出するため, 先の分析により得られた知見から, あらかじめ“暖かさ”から“志向性”へ, または“追従”から“べき”へのパスは引かなかった。その結果, EI-SESに影響を



注) パスおよび標準化係数を示した。紙面の都合により誤差は省略してある。
 /の左が志向性、右がべきを説明変数とした分析。
 決定係数は以下の通り。信頼.10**/.05**, 自律性.33***/.33**, 主導性.29***/.31**, 志向性/べき.29***/.15**。
 *: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$, ns.: not significant.

Figure 2. 志向性およびべきの専制に影響をおよぼすモデルの検討2

およぼす要因モデルについて、適切な適合度が得られた。ただし、べきについてはRMSEAが.08でありさらなるモデル検討の可能性も示された(志向性: $GFI = 1.00, AGFI = .99, RMSEA = .00$; べき: $GFI = 1.00, AGFI = .93, RMSEA = .08, AIC = 30.38$)。

“暖かさ”は“信頼”($\beta = .32, p < .001$)、“自律性”($\beta = .15, p < .05$)には影響しているが、“主導性”には直接影響しない($\beta = -.01, ns.$)。次に“信頼”は、“志向性”($\beta = .18, p < .05$)に影響し、“自律性”($\beta = .51, p < .001$)、“主導性”($\beta = .30, p < .001$)にも影響していた。さらに“自律性”は“志向性”($\beta = .27, p < .001$)に影響し、“主導性”($\beta = .30, p < .001$)にも影響している。最後に“主導性”は“志向性”に影響していた($\beta = .20, p < .001$)。

一方“追従”は“信頼”($\beta = -.22, p < .001$)、“自律性”($\beta = -.15, p < .05$)、“主導性”($\beta = -.14, p < .05$)に弱い影響を与えていた。次に“信頼”は、“べき”($\beta = -.18, ns.$)に直接影響しておらず、“自律性”($\beta = .53, p < .001$)、“主導性”($\beta = .30, p < .001$)に影響していた。さらに“自律性”は“べき”($\beta = -.32, p < .001$)に影響し、“主導性”($\beta = .27, p < .001$)にも影響していた。最後に“主導性”は“べき”に影響しなかった($\beta = .08, ns.$)。

なお、“主導性”から“べき”へのパス係数が有意でないことから、統計的観点から“べき”を説

明するのに“主導性”なしでモデルが形成される可能性が考えられたので、“主導性”とそれに伴う誤差変数やパスを除いたモデルを検討したところ、十分な適合度が得られた($\chi^2 = 1.80 (p > .05), df = 1, GFI = .99, AGFI = .99, CFI = .99, RMSEA = .06, AIC = 19.8$)。

考察

結果のまとめと考察

本研究では、幼少期の家庭の雰囲気に対する主観的認識を測定する“家庭の雰囲気尺度”が作成され、信頼性および内容的妥当性が確認された。次に“志向性”“べき”の2軸で自我理想型人格を分類するEI-SESの下位尺度と、“家庭の雰囲気尺度”およびS-ESDSの相関分析を行ったところ、“志向性”は、S-ESDSの下位尺度“信頼”“自律性”“主導性”と正に関連し、“べき”は負に関連していた。また“志向性”は“家庭全体”および“暖かさ”と正の弱い関連を、“べき”は“家庭全体”および“追従”と弱い負の関連を示した。家庭の雰囲気尺度の“否定”は“志向性”・“べき”とは有意な相関が示されなかった。第3に、共分散構造分析を用いて、幼少期の家庭の雰囲気が、直接志向性やべきに影響し、かつ初期の自我発達を通して間接的に志向性やべきに影響するモデルを検討したとこ

ろ、“暖かさ”“追従”はそれぞれ、“志向性”“べき”にS-ESDSを通して間接的に影響していた。つまり“志向性”や“べき”はそれぞれ、“暖かさ”や“追従”に直接規定されるのではなく、“暖かさ”や“追従”という家庭の雰囲気の中で、“初期の自我発達”である“信頼”“自律性”“主導性”が高くなることに規定され、結果として“志向性”は高くなり、“べき”は低くなることと解釈された。最後に、初期の自我発達内での影響をより詳細に組み込んだモデルを検討したところ次の結果が得られた。“暖かさ”は“信頼”を高め、“信頼”を通してまたは直接“自律性”を高め、その“信頼”と“自律性”を通して間接的に“主導性”を高めており、“信頼”“自律性”“主導性”がそれぞれ志向性を高めていた。同様に、“追従”は、“信頼”“自律性”“主導性”を低め、これら3段階はそれぞれ前の段階から影響を受けるが、“べき”を直接低めるのは“自律性”のみであった。つまり“志向性”は“暖かさ”によって高められた“信頼”“自律性”“主導性”からそれぞれ規定されると解釈された。一方“追従”によって“信頼”が低められるとその影響で“自律”も低められ、そのことで“べき”が高まることと示された。さらに“べき”に影響を及ぼすモデルの検討において、“べき”を規定するモデルとしては“追従”“信頼”“自律性”のみを説明変数とするモデルの方が適切だと解釈された。

なおこれらの共分散構造分析において、“志向性”の決定係数は.38、“べき”の決定係数は.16だった。本研究で作成したモデルは幼少期の家庭の雰囲気と初期の自我発達のみから“志向性”もしくは“べき”を検討するものだったが、他の要因を導入することで、志向性・べきの予測精度が上がると考えられる。

初期の自我発達と志向性／べきの専制の関連

初期の自我発達としての“信頼”“自律性”“主導性”“志向性”と“べき”が潜在変数“初期の自我発達”に規定されていた点についてさらに発展的に理論を展開し、検討したい。そもそもEriksonは“成長するものはすべてグランドプランをもち、このグランドプランから各部分が発生し、それぞ

れの部分にはそれが特別に優勢になる時があり、やがてすべての部分が機能する全体を形作るようになる”(Erikson, 1959 西平・中島訳 2011, p.47)と述べており、漸成発達理論の各段階の発達主題はまったく独立のものではなく、人格という布を織りなす糸と糸の絡み合いのように捉えられている。S-ESDSを作成した三好他(2003)でも各主題の相関の高さが指摘されており、本研究でも“信頼”“自律性”“主導性”は中程度以上の正の相関が示された。そこで、Figure 1で示された結果は、幼少期の家庭の雰囲気における“暖かさ”や“追従傾向(のなさ)”という環境が規定因となり、自我発達の主題の解決程度が全体的に高められることを示していると言える。つまり自我発達の基礎となる他者・自分自身や世の中を信頼し、自尊心を失うことなく自分を律し、自分自身の意志を示し、さらに自分の意志が具体的に目標・方向性を持つようになるので、青年期というモラトリアム期において、将来展望を描くことが促進され、志向性が高められると解釈できる。一方Horneyによれば、“べき”は“あるがままの…姿など忘れてしまえ…この理想化された自己になることこそが重要”(Horney, 1950 榎本・丹治訳 1998, pp.70-71)という自己否定の感覚である。つまり基本的信頼感が低く自己受容できないことや、意志を発揮できないこと、罪悪感にとらわれることは、“べき”の形成と関連すると考えられる。さらにErikson(1959)によれば、第I段階の発達主題基本的信頼感は、具体的に対自的・対他的な信頼の感覚(Erikson, 1968)であり、青年期には、将来を信じ明るい展望を描くことのできる時間的展望としてあらわれる。モラトリアム期にあり具体的な将来像を形成しつつある青年にとって、自分や、自分に関わる他者、さらに“世の中”に信頼の気持ちを持つことは、将来を志向し不明瞭な未来へチャレンジする際の心理的基盤となると考えられる。茂垣(2005)において、志向性が高くべきの高さの異なる2群(志向性高・べき低:自我理想型、志向性高・べき高:超自我型)では、べきの高い群は“がんばる”“努力する”と上昇志向は強いが、

挫折に対する落ち込みも大きかった。基本的信感に下支えされた自信が、青年期におけるべきの専制の低い志向性の高さにつながると考えられる。

“信頼”と“自律性”、“主導性”それぞれの、“志向性”“べき”への影響 一方、今回の分析で、その関連の深い自我発達各発達主題を個別に、また階層的にみることで (Figure 2)、全体としては一体となって働く自我機能が、各部分においてはどのような役割を果たすのかの検討にもつながったと考えられる。また先述したように、先行する発達段階の主題の解決の程度が、後の段階の主題の取り組みに影響すると述べられている (Erikson, 1959) が、その点を具体的に検討した研究はまだ多く見られないので、本研究はその一助となるだろう。本研究の Figure 2 で見出されたのは、幼少期の家庭の雰囲気背景として、“信頼”を下支えとした“自律性”“主導性”の高さが“志向性”の高さにつながりがあり、幼少期の家庭の雰囲気背景とした“信頼”を下支えとした“自律性”が、“べき”の高さを規定していた。Erikson (1968) は第Ⅱ段階の発達主題である自律性を、自我の主體的な意志力によるものだと述べており、その過程で子と親の意志が衝突し“容赦なく大人を払いのけようとする” (Erikson, 1959 西平・中島訳 2011, p.67) 可能性もあることを指摘している。これがいわゆる第1次反抗期と言われるものであるが、この際、“自由選択の自律を、適切に導かれながら徐々に経験することができなかつたり、あるいは信頼を早い時期に喪失することによってその経験が弱められたりすると、敏感な子どもは、識別し操作する自分の衝動をすべて自分自身に向けてしまうことがある。その子は自分自身を過剰に操作したり、早熟な良心を発達させたりする。” (Erikson, 1959 西平・中島訳 2011, pp.70-71) とも述べている。Horney (1950) はべきの専制の形成時期について明確に述べていないが、より原初的で厳格で自我を妨げる“べきの専制”は自律性の形成に深く関わるのではないだろうか。

まとめると、本研究で検討した要因に限って言えば、暖かさや追従傾向のない家庭の雰囲気を背

景として高められた基本的信頼に下支えされた意志 (自律性) や目標 (主導性) が高いことは、青年期の“志向性”、つまり未知なる世界に向けてやりたいことを探し進む力と関係すると考えられるし、主体性を失った、～すべきという観念にとられるような“べき”を低減させると考えられる。さらに、Eriksonの示した初期の自我発達の志向性やべきの専制への影響をより詳細に検討すると以下の結果が得られた。まず前提として、前の段階の発達主題はより後の段階の主題へとポジティブに影響することが示され、Erikson (1959) の記述を裏付けた。その上で、志向性への影響は、基本的信頼や自律性、主導性がそれぞれ影響しているが、べきの専制に対しては、特に自律性が影響しているという知見が得られた。

今後の展望

本研究で得られた知見を、家庭教育や青年教育の場で生かすことが出来ると考えられる。また本論では、幼少期の養育環境や自我発達の様相について、回顧的手法をとって、あるいは過去の自我発達のあらわれとしての現在の自我発達を、青年に問うた。今後、他の形成因の検討も含めて、縦断的な検討や、生涯発達の視座を有する伝記研究などにより、さらなる研究を展開させたい。

引用文献

- Blos, P. (1962). *On adolescence: A psychoanalytic interpretation*. New York: The Free Press.
- Erikson, E.H. (1958). *Young man Luther: A study in psychoanalysis and history*. New York: W. W. Norton.
- (エリクソン, E.H. 西平 直 (訳) (2002). 青年ルター みすず書房)
- Erikson, E.H. (1959). *Identity and the life cycle: Selected papers. (Psychological Issues vol.1. Monograph1.)* New York: International Universities Press.
- (エリクソン, E.H. 西平 直・中島由恵 (訳) (2011). アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)

- Erikson, E.H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. New York: W. W. Norton.
 (エリクソン, E.H. 岩瀬庸理 (訳) (1982). アイデンティティ (改訂版) 金沢文庫)
- Freud, S. (1940). *Gesammelte Werk, Bd. XI, XV*, London: Imago Publishing.
 (フロイト, S. 高橋義孝・下坂幸三 (訳) (1977). 精神分析入門 (下) 新潮文庫)
- Horney, K. (1950). *Neurosis and human growth*. New York: W.W. Norton.
 (ホーナイ, K. 榎本 譲・丹治竜郎 (訳) (1998). ホーナイ全集: 6 神経症と人間の成長 誠信書房)
- 三好昭子 (2008). 人格特性的自己効力感の形成に影響を及ぼす要因についての探索的検討 立教大学心理学研究, **50**, 11-24.
 (Miyoshi, A. (2008). Factors effecting to the formation of generalized self-efficacy. *Rikkyo Psychological research*, **50**, 11-24.)
- 三好昭子・大野 久・内島香絵・若原まどか・大野千里 (2003). Ochse & PlugのErikson and Social-Desirability Scaleの日本語短縮版作成の試み 立教大学心理学研究, **45**, 65-76.
 (Miyoshi, A., Ono, H., Uchijima, K., Wakahara, M., & Ono, C. The development of a Simplified Version of Ochse & Plug's Erikson and Social-desirability Scale (S-ESDS). *Rikkyo Psychological research*, **45**, 65-76.)
- 茂垣まどか (2005). 青年の自我理想型人格と超自我型人格の精神的健康: 志向性とべきの専制の様相の観点から 教育心理学研究, **53** (3), 344-355.
 (Mogaki, M. (2005). Mental Health in Young Adults: Ego Ideal and Superego From the Point of View of Intentionality and "the Tyranny of the Should." *Japanese Journal of Educational Psychology*, **53**, 344-355.)
- 西平直喜 (1981). 伝記に見る人間形成物語 1: 幼い日々にかいた心の詩 東京: 有斐閣.
 (Nishihira, N.)
- 西平直喜 (1990). 成人になること 東京: 東京大学出版会
 (Nishihira, N.)
- 西平直喜 (1996). 生育史心理学序説 東京: 金子書房
 (Nishihira, N.)
- 小川雅美 (1991). PBI (Parental Bonding Instrument) 日本版の信頼性, 妥当性に関する研究 精神科治療学, **6**, 1193-1201.
 (Ogawa, M. (1991). Reliability and validity of the Japanese version of PBI. *Japanese journal of psychiatric treatment.*, **6**, 1193-1201.)
- 岡田 努 (1987). 青年期男子の自我理想とその形成過程 教育心理学研究, **35**, 116-121.
 (Okada, T. (1987). The Ego Ideal in male Adolescence and its process of formation. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **35**, 116-121.)
- 大野 久 (1996). ベートーヴェンのハイリゲンシュタットの遺書の“自我に内在する回復力”からの分析 青年心理学研究, **8**, 17-26.
 (Ono, H. (1996). Powers of Recovery Inherent in a Young Ego in Beethoven's HEILIGENSTÄDTER Testament. *The Japanese journal of Adolescent Psychology*, **8**, 17-26.)
- 大野 久 (2010a). 伝記研究により自己をとらえる. 榎本博明・岡田努 (編) 自己心理学: ① 自己心理学研究の歴史と方法 金子書房 pp.129-149.
 (Ono, H.)
- 大野 久 (2010b). 青年期を理解する 大野 久 (編) シリーズ生涯発達心理学: ④エピソードでつかむ青年心理学 京都: ミネルヴァ書房 pp.1-33.
 (Ono, H.)
- 大野 久・キンイクン・三好昭子・内島香絵・茂垣まどか (2007). ESDSを用いたエリクソンの漸成発達理論の日中比較による検討 日本青年心理学会第15回大会発表論文集, 54-55.

- (Ono, H., Jin Yijun, Miyoshi, A., Uchijima, K., & Mogaki, M.)
- 小塩真司 (2004). SPSSとAMOSによる心理・調査データ解析—因子分析・共分散構造分析まで 東京図書
(Oshio, A.)
- Parker, G., Tupling, H., & Brown, L.B. (1979). A parental bonding instrument. *British Journal of Medical Psychology*, **52**, 1-10.
- 佐藤浩一・榎 洋一・下島裕美・堀内 孝・越智啓太・太田信夫 (2004). 自伝的記憶研究の理論と方法 日本認知科学会テクニカルレポート, **51**.
(Sato, K., Maki, Y., Shimojima, Y., Horiuchi, T., Ochi, K., & Ohta, N. (2004). Theories and research methods of autobiographical memories. *Japanese cognitive Science society technical report*, **51**.)
- Schenenga, K. (1983). Father Absence, the Ego Ideal and Moral Development. *Smith College studies in social work*, **53** (2), 103-114.
- Van den Daele, L. D. (1968). A Developmental Study of the Ego-Ideal. *Genetic Psychology Monographs*, **78**, 191-256.
- 若原まどか (2003a). 人格発達に影響する志向性に関する研究動向：自我理想概念を中心に立教大学心理学研究, **45**, 39-49.
(Wakahara, M. (2003a). A Review of Studies of the Influence of Intentionality on Personality Development with particular reference to the Ego-Ideal. *Rikkyo Psychological research*, **45**, 39-49.)
- 若原まどか (2003b). 青年期における、志向性の自我理想的・超自我的あられ (4) —自我理想型人格・超自我型人格の形成過程に関する、面接法を用いた検討— 日本青年心理学会第11回大会発表論文集, **11**, 54-57.
(Wakahara, M.)

—2013.9.30受稿, 2013.12.15受理—